

## ローマ人への手紙第七七回質問

- 7..14 私たちは、律法が靈的なものであることを知っています。しかし、私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です。
- 7..15 私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことせず、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。
- 7..16 自分のしたくないことを行っているなら、私は律法に同意し、それを良いものと認めていることになります。
- 7..17 ですから、今それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪なのです。
- 7..18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

(ロマ七章一四―一八節／新改訳2017)

(問一) この箇所は、人が生きていくのに、外なる律法と内に宿る罪と、どちらの力が強いことを示していますか。

(問二) それなら「律法の下にある」生活とは、どんなものになりますか。



## 悩める人

(ロマ七章一四―一五節)

ローマ教会への手紙の中でも、最も興味深い個所は、七章一四―二五節です。この個所は興味深い個所であるだけに、その解釈については、意見が分かれます。大きく分けて三つの解釈があります。第一は、これがまだ生まれ変わっていない人についての言及であるというものです。未信者の状態についてしているというのです。第二は、これが生まれ変わった人についての言及であるというものです。つまり信者の状態についてしているというのです。第三は、これが生まれ変わった人についての言及ではあるけれども、入信したばかりのころの状態で、第二の恵みを受けていない人の状態についてしているというのです。

キリスト教会の歴史を見えますと、大変興味深いことに、最初の三世紀の間は、第一の解釈がとられました。そのころの教父たちはみな、これが生まれ変わっていない人の状態についてしているのだという立場をとりました。紀元四〇〇年ごろ活躍したあのアウグスティヌスも、初めのうちは、その解釈に従っていました。のちに態度を改め、第二の解釈でなければならぬと主張するようになります。その後、宗教改革やピューリタンの指導者たちは、この第二の解釈を採用し、これが生まれ変わった人の状態についてしているとして解釈しました。そして、改革主義の人々はみなこの解釈をとっております。ところが、のちにアルミニヤンの人々が、第一の解釈をとるべきだと言い出し、それに従う人々が現われる反面、アルミニヤン独特の第三の解釈を主張する人々が

現われて来ました。つまり、これは生まれ変わってはいるけれども、第二の恵みを受けていない人の状態を描いているというのです。

それでは、この三つの解釈のどれが正しいのでしょうか。わたしたちがまず注意をしなければならぬのは、どのような時にも、聖書解釈に当たっては、偏見を捨てなければならぬということ事です。自分は改革主義の神学だから第二の立場だと決めてかかってはなりません。また、自分はアルミニヤン神学だから第三の立場だと決めてかかってはならないのです。そこで、この個所を偏見なしに正しく解釈することによつて、この個所の言わんとするところを知りたいと思いません。つまり、この個所でパウロが言おうとしていることは何なのかということを引き出して来るといふやり方で、学んでいきたいと思ひます。

そこで、まずこの個所を分解してみましよう。一四節は、ここで描かれている人の状態についての一般的な叙述がなされていきます。「というのは、わたしたちが知っているように、律法は靈的なものである。しかし、わたしは肉体的なものである。罪の下に売られている者である。」

一五節では、毎日の生活の中に示されている状態について叙述されています。「わたしには自分のしていることがわからない。というのは、自分のしたいと願うことはしないで、自分がいやでしかたのないことばかりをしているからである。」

一六一―一七節では、その人とその行動についての叙述から

の二つの推論を述べています。「ところで、わたしは自分のしたくないことをしているのだから、律法が良いものであることを認めていることになる。そうすると、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしのうちに宿っている罪なのである。」

一八―二〇節では、その人について一七節で述べたことの説明が語られています。「というのは、わたしのうち、すなわち、わたしの肉のうちには、善が宿っていないことを、わたしは知っている。善をしたいという願いは、いつもわたしのうちにあるのだが、それを実行できないからである。なぜなら、わたしがしたいと願う善はしないで、したくないと思う悪ばかりをするからである。ところで、わたしは自分のしたくないことをしているのだから、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしのうちに宿っている罪なのである。」

二一節では、また別のことを述べています。これは、一四節で述べていることをもう一度取り上げていますが、さらに深い調子で述べています。「そこで、わたしが善をしたいと願えば、必ず悪がわたしのうちにあるという原理を発見する。」

二二―二三節では、二一節で述べたことを、説明しています。「というのは、内なる人としては、神の律法を喜んでいますが、わたしのからだのいろいろな部分には、別の原理があって、それがわたしの心の原理に対して戦いをいどみ、わたしをからだのいろいろな部分にある罪の原理のとりこにして

いるのを見いだすのである。」

二四節には、今までパウロが叙述してきた恐るべき状態の現実からの絶望の叫びと同時に、そこからの救いを求める叫びをしるしてあります。「わたしはなんといいみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救い出してくれるだろうか。」

二五節では、救いの叫びと今まで述べてきたことの結びをしるしてあります。「わたしたちの主イエス・キリストによって、神に感謝する。だから、このわたしは、心では神の律法に仕え、肉では罪の原理に仕えているのである。」

以上のようにこの個所にしるされるところを分解してみても、もう一度、この全体のまとまりを、その前からの続き具合について見てみますと、その最初に「というのは」という接続詞があつて、その前のところと全く無関係なことが述べられているのでないことがわかります。この個所は、今まで述べてきた律法の効用についての続きなのです。

七節のところで、「律法は罪なのか」という問題提起をして、パウロは「断じてそうではない」と答えてから、律法の効用について述べました。そして、再度一三節で「それでは、この良いもの（律法）が、わたしにとって死をもたらすものになったのだろうか」という問題提起をして、ここでもパウロは「断じてそうではない」と答えてから、その説明をしています。「罪は、それが罪であることの現われるために、良いもの（律法）によって、わたしを死に至らせたのである。これは、戒めによって、罪がいつそうはつきり罪深いものと

なるためなのである。」そして、その説明の続きが一四節以下の個所なのです。

よく見ると、一四節のところから、動詞の時制が違っています。九——一節では、「かつて、わたしは律法なしに生きていたが、戒めが来た時、罪は生き、わたしは死んでしまった。いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わたしにはわかった。というのは、罪は戒めを利用して、わたしを欺き、戒めによってわたしを殺したからである」としてしています。つまりすべてを過去形でしるしているわけです。しかし、ここでは現在形でしるしています。「わたしは肉的な者であって、罪の下に売られている者である。」パウロははつきりと現在形でしるしています。ですから、アウグスティヌスは、生まれ変わる前の状態のことをしるしているという解釈を捨てて、生まれ変わってからのち、つまり現在のパウロの状態についてしるしているという解釈をとるに至ったのです。

それでは、一四節の本文を見ていきましょう。「というのは、わたしたちが知っているように、律法は靈的なものである。」ここで「靈的なもの」と言われていることは、六節を学んだときにも言及したコリント教会への第二の手紙三章の「文字は殺し、御霊は生かす」という意味での「御霊」のことであり、当時のユダヤ人が律法の文字に拘泥し、その精神を見失っていたのに対して、律法の真の精神を指していることばです。そういう意味では、「いのちに導くはずのこの戒め」なのです。

ところが、悲しむべきことに、「わたしは肉的な者であつて、罪の下に売られている者」です。ここで言われている「肉的な者」とか「罪の下に売られている者」とは何のことなのでしょう。『肉的な者』<sup>(3)</sup>ということばが普通に使われる場合、それは、五節や八章三節以下で使われているように、生まれ変わっていないものを指しています。しかし、ここではすでに述べましたように、パウロの過去のことではなく、今のことですし、また、生まれ変わっていない人が「律法は靈的なものである」とわかるわけがありませんから、このよきな意味でないことは明らかです。それでは、そのほかの使用法を聖書の中に求めていきますと、コリント教会への第一の手紙三章一節に出会います。これは、明らかにクリスチャンに対して使われているのですが、「キリストにある幼子」であり、靈的に十分成長していないクリスチャンを意味しています。これも、この場合、当てはまりません。それでは、これはどういう意味なのでしょう。

確かにこの個所は非常にむずかしく、「わたしは肉的な者であつて、罪の下に売られている者である」という表現だけを見ると、これは生まれ変わっている人よりは、生まれ変わっていない人に当てはまるように見えます。しかし、生まれ変わっていない人がどうして律法を靈的なものと見ることができなのでしょう。そこで、ある人々は、これをパウロのうち一二つの部分があつて、その一方を指して言っていると考えます。それは、これに続く一五節も同じように解するので、す。「わたしには自分のしていることがわからない。という

のは、自分のしたいと願うことはしないで、自分がいやでしかたのないことばかりをしているからである。」しかし、よく読めば、決してパウロの中に二つの部分があつて、その一方と他方との葛藤を言っているのではなく、ひとりの人間としての悩みをしるしていることがわかります。

それでは、一五節はどういう意味なのでしょう。今までの文脈から考えてみると、よくわかると思います。今までも述べてきた主題は、律法でした。ですから、ここでも「律法は靈的なものである」ということが言いたいことであつて、その靈的な律法を守りたいという願いを持っているのに、それを守ることができない現実の人間の悩みについて述べているのです。

その人間は、どういう人間なのでしょう。こうした悩みは、決して生まれ変わっていない人が持つことはできません。「肉にある者は神を喜ばせることができない」<sup>(4)</sup>のですから、生まれ変わっていない人であるはずがありません。それでは、生まれ変わった人なのでしょうか。生まれ変わった人はだれでも、ある程度このような経験を持つてゐることは事実です。きよめを主張する人々の中には、きよめられれば、そのようなことは全くなくなると主張する人々がおりますが、それは罪についての間違つた理解によるものです。六章のところではつきり教えられているように、罪はわたしたちのからだになお残つてゐるのです。ですから、パウロは六章一一—一三節の勧めをしていたわけです。

「このように、あなたがた自身も、罪に対しては死んだ者、



神に対してはキリスト・イエスにあつて生きている者と思  
い定めなければならぬ。だから、あなたがたの死ぬべき  
からだを罪の支配にまかせて、その情欲に従わせてはなら  
ず、あなたがたのからだのどの部分でも、義の道具とし  
て神にささげなさい。」

つまり、パウロは自分がいつも完全ではないことを知って  
いましたが、そうかと言って、自分がいつも敗北の人生ばか  
りを送っていると言っているわけではありません。ですから、  
彼は「あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にまかせて：  
はならず」と勧めているのであり、またピリピ教会への手紙  
の中でも、次のように勧めているわけです。

「兄弟たち。わたしはすでにそれを捕えたのだとは思って  
いない。わたしは、ただこの一事に励んでいる。すなわち、  
うしろのものを忘れ、前のものに向かつて進んでおり、キ  
リスト・イエスにあつて上に召してくださる神の栄冠を得  
るために、目標を目指して一心に走っているのである。だ  
から、成人した者たちはみな、このような考え方を持とう  
ではないか。……兄弟たち。わたしの模範に従ってほしい。  
また、あなたがたと同じように、わたしたちを手本として  
歩んでいる人たちに目をとめなさい」

わたしたちは生まれ変わった者にも失敗や敗北があること  
を知らなければなりません。このことを認めない人は、失敗  
や敗北した時に、立ち上がることができないほどのショック  
を受けるでしょう。しかし、それに打ち勝つべきことを聖書  
は教えているのです。それは決して律法によつてではありません

せん。律法は霊的なものですが、人に律法を守る力を与えません。それを与えるのは、十字架上でわたしたちの身代わりの贖いを成し遂げてくださったキリストです。

注①「霊的なもの」(七・一四)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、プネウマティコス (πνευματικός) ということばが使われています。

(2) コリント教会への第二の手紙三章六節 新改訳。

(3) 「肉的なもの」(七・一四)と訳されたことばは、原語のギリシヤ語では、サルキノス (σαρκινός) ということばが使われています。

(4) ローマ教会への手紙八章八節。

(5) ピリピ教会への手紙三章一三―一五、一七節。



尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズ・ロマ書講解要約)より